

---

# ヒーロー会議

上下 左右

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ヒーロー会議

### 【Nコード】

N5221V

### 【作者名】

上下 左右

### 【あらすじ】

レッド・ブルー・イエロー・グリーン・ピンク。

現代のキワドイところを取りすぎた気がしなくもない彼らが世界を救う！

…のは無理だから、日本を救います！

（主にレッドのみが）只今、奔走中！

## 第一回目の記録（前書き）

注意

- 1・フィクションです
- 2・ギャグです
- 3・笑えなくとも怒らないでください
- 4・得もありませんが損もないので、是非とも読んでください

## 第一回目の記録

「今日、お前たちに集まってもらったのは、他でもない」

場所は会議室、のようにセットされた、ただの屋外。  
アンダー・ザ・ブリッジ。

五つの段ボールの椅子が、円を作っていた。  
三人の男女が、それに腰掛けている。

ある者は半纏を羽織って煎餅を片手に茶を飲み、ある者は深い眠り  
の中、ある者は鬼気迫る形相でゲームに打ち込む。

俺は、それらを見渡した。

せつかく段ボールの上に立って発言したのに。

溜め息を吐いた。  
長く長く吐いた。

しかし、労りの言葉は聞こえてこない。

「あのさー、もう少し話を聞けよ。俺、レッドなんだから」

「レッドー、僕は君を尊敬するよー。清い心で全面的に支持するよ

ー」

「……くかぁー……」

「ラスボス、キタアーーー！おらぁ、死ね死ねえー！」

何故だろう。悲しくないのに涙が出るよ、お母さん。

いや、嘘。

悲しいです。  
すみません。

ああ、嘆かわしい。

ヒーローと言えば、それは夢。  
無垢な子供の憧れ。

その実態がこれだ。

「グリーンという名の最年少！茶とか飲んでんな！」

「大丈夫。緑茶だから」

「そういう問題じゃねえ！！」

「ブルー！せっかく家から引つ張り出したんだ！ゲームばかり、  
してんな！」

「…チッ」

「舌打ちやめろ！俺、静かに傷付くから！」

「イエローは、とりあえず起きろおおおお！！」

確かにね。

近年のレッドのキャラは、ただ元気だけが取り柄っていう元来から  
外れているような気がしますよ。  
個性は大事ですよ。

でも、程度つてもんがあるでしょう？

「とにかく、今日は反省会だ。意見や質問があるなら言え！」

グリーンが手を挙げた。  
俺は偉そうに指差す。

「僕は緑茶、レッドは紅茶、ピンクは桜茶で、イエローはカレーな  
んですけど、ブルーは海水でいいかな？」

「何の話だ？」

「飲み物の話」

「いくつか違うものがあつたが？」

「液体は全て飲み物！」

「お前はボクツ子で止めとけ！無駄なことをするな！」

「だって大志を抱いちゃう。少年だもん」

「黙れ！！！！」

ブルーが手を挙げた。  
俺は驚きつつ指差す。

「光合成をしない人間が光を浴びることに、意義はあるだろうか？」

「かみくだくと？」

「俺は引きこもっていたい」

「却下」

「はいはい」

上から声がする。

見上げると、橋の上でピンクが手を振っていた。

可愛い顔。

可愛い服。

君だけは王道を守ってくれるんだね、ピンク！  
と、言いたいところだが。

「今、行くね」

そう言つて、見事にダイブしてくる。  
ワンピースが風でフワリと広がった。  
お約束だ、そんなトキメキも束の間。

そこに覗くのは、男物のパンツ。  
ちなみに、青のボクサー。  
ピンクのくせに。

遅刻魔の女装少年め。

今日こそ、叱る。

さあ、いざ！

「レッドお、ごめんね？」

首の傾き四十五度、困つたような表情、顔の前で合わせられた手。

「……………以後、気を付けるように」  
「うじゃー！ー！」

男とは、なんと単純な生物か。

「で、何してたのー？」

「反省会」

「反省会？（笑）」

「何、最後の（笑）って……」

「だあって！このメンツで話し合いなんか、無理に決まっているから！」

急須から湯飲みで茶を注ぎつつ、グリーンが言う。

「レッドの空回りだ」

ゲーム機から目を離さないまま、ブルーが言う。

「回りすぎだろ」

くると回りワンピースの裾を広げながら、ピンクが言う。

「地球一周クラスだよな」

いつの間にか目を覚ました、イエローが言う。

「あ、おはよ。ねえ、聞いて。鼓膜でトランポリンする夢を見たんだけど」

ヒーロー。

俺たちは、英雄と書いてヒーロー。

…だよな？

## 第二回目の記録

「敵を倒そうと思います!」

選手宣誓の如く、腕をピンと伸ばして俺ことレッドは高々と宣言をする。

まさに威風堂々。  
ヒーローの鑑。

「そっか。頑張れ」  
と、グリーン。

「応援するねっ」  
と、ピンク。

「帰ってもいい?」  
と、ブルー。

「いいんじゃない?」  
と、イエロー。

某ファミリーストランに、俺たちはいる。

本当は今回も橋の下に行きたかったのだが、できなかった。

四人が激しく拒否したのだ。

拒否したのは、場所ではなく、集会そのもの。

俺は必死に食い下がり、一人一つ食べ物奢ることを条件に、彼らを集めた。

混ぜすぎてグロテスクになった抹茶餡蜜をつつきながら、グリーンが言う。

「で、誰を倒したいのさ？」

ワンホールのショートケーキを一人で食べながら、ピンクが言う。

「ナント力星人とか、王道だね」

サンドイッチを左手に、空いた手では漫画を読みつつ、ブルーが言う。

「二次元に行かなきゃ、そんな奴らないよ」

揚げ物プレートを平らげ、イエローが言う。

「私、胃もたれしそう」

本当に嘆かわしい。

「お前ら。ヒーローは、少年の憧れなんだぞ？」

「中学生なグリーン主張。これからの時代、そんなのは古いよ」

「高校生なピンク主張。最近、ヒーロー役の俳優目当ての女子視聴者もいます」

「ニートなブルーの主張。特撮よりアニメがいい」

「大学生なイエローの質問。胃薬、ある？」

悲しい。

こんなにも基本から逸れていいのだろうか。

ピンクが男の娘であるせいでたまに忘れるが、メンバーはイエローだけの紅一点。

このバランスの悪さ。

ピンクが密かにレッドに好意を抱いている、という甘酸っぱい理想の設定も不可能。

逆になる危ない可能性がある、今日この頃。

何よりメンバーのこの無気力さ。

「終わっている。戦隊物特有のキラキラが死んでいる」

「失敬な。死んではいいないさ」

「せめて瀕死にしてよお」

「ポケットサイズの某モンスターなら、ピコンピコン言っているな」

「私、トイレに行ってくる」

団結力は何処だ？

アイコンタクトで通じ合い、たまに喧嘩して仲を深めるような絆は？  
小学生向け漫画並みにクサイ友情は？

これは、やはりブラックに期待するしかない。

途中参加のナイスガイ。

クールにイイとこ取り。

よくレッドと衝突する。

強くて不器用な一匹狼。

最終回目前に、レッドを庇って負傷。

ここで死なないのがポイント。

なんたって対象年齢は低め。

希望が常になくってはならないのだ。

負傷シーンも残酷すぎるのはエヌ・ジー。

最終回でレッドは仇を取る。

ラストでは拳と拳をコツンと合わせ、男同士、無言でどや顔。

その後、二人は親友に。

まだ出会っていない人に夢を抱くのはいいなあ。

気楽だもんなあ。

楽しくなってきた。

ワクワクしてきた。

「なあ、モモ。コウがバカ面を晒しているよ」

「レッドの売りはバカだから。ね、アオイ？」

「そんなこと、俺じゃなくてレモンにふって」

「ねえ、ワカバ、胃薬とか持っているかな？」

「はい、そこおおお！さらつと本名を言わない！ヒーローは裏も表もヒーロー！もし、言うとしても、それなりのシチュエーションを用意しろ！」

ビシツと注意すると、斉唱が返ってきた。

「うるさい」

なんだかんだ、まともはないが息は合うようだ。

俺以外では。

あれ、視界がぼやけてきたぞ。

アハハ。

### 第三回目の記録

ゴッド・ア・メエエ！  
ゴッド・ア・メエエ！

初期設定のままの着信音が、大音量で鳴った。  
グリーンの携帯からだ。

多分、got a mailだろう。

さすが機械。

ナイス発音。

羨ましいくらい。

グリーンは寝っ転がり漫画を読んでいた。

ちなみに、ここは俺の部屋。

謙虚さゼロの態度を見ると、逆にこちらが遠慮したくなるのは何故だろう。

我ながら損な性格。

彼はボタンと開けてそれを見ると、すぐに仕舞った。

「え？」

「何？」

「返信は？」

「シカト」

相手の方、可哀想に。

「どんなメール？」

「見る？」

グリーンは携帯を俺の前に差し出した。  
ちなみに黒色。

グリーンのくせに。

さてさて、画面を見ると、

『きゃあ！助けて！

大変だ×2！！

怪獣が出現したぞ！

レンジャー出動だ！』

………つて、

「何故、レッドじゃなくてグリーンに届く！？」

「さあ？」

「これは無視してはいけない情報だろう！？」

「そう？」

「とにかく、即、全員に集合をかけるぞ！！」

「えー？」

まずはピンク！

ピポパポ。

『オカケニナッタ電話ハ、電源ガハイッテイナイカ』  
高校生なら、いつでも電源オンにしとけ！

『電波ノ届カナイ場所ニアル為、カカリマセン』  
そんな所に行くな！

…次はブルー！

ピポパポ。

プルルルル。

プルルルル。

プルルルル。

『留守番電話サービスニ、接続シマス』

ブルー、お前、絶対に表示を見て、出るのをやめただろう！

……イエロー！

ピポパポ。

プルルルル。

『ブチッ』

ピポパポ。

プルルルル。

『ブチッ』

出もしないで切るのかよ！？

どうしよう。

泣きたい。

「俺らだけで行くぞ！！」

「えー。あとで奢ってよね」

家を飛び出す。

そして、停止。

「怪獣様は、何処ですか？」

彼は携帯を取り出し、暫く操作してから閉じた。

「駄目」

「へ？」

「今回の怪獣は、欠点がある」

グリーンが鼻の辺りで指を、くいつと動かした。  
お前、眼鏡してねーだろ。

「GPSが付いていない」

「……………へ？」

「GPSが付いていない、と言った」

じーぴーえす、とな？

「怪獣って、そんなの付けているの？」

「当たり前さ。きっと今回の奴は貧乏なんだろうね。だから、見逃してあげようよ」

…いいのだろうか。

「忙しいんだよ。まだ最終巻まで読んでいないんだ」

そこかよ。

あれ？

そういえば。

「今回はって？」

「今まで、同じようなメールは何回も来たよ。迷惑メールフォルダに入っている」

「シカトしていたのか!？」

「場所の特定まではしていたよ。来年の自由研究は、怪獣の出現場所の規則性だから」

「自由研究!？」

「大学生は中学生のつらさをすっかり忘れてるよね。そうやって年を重ねて、いつも、『今が一番つらい』と嘆くんだ。人間ほど主観的な動物は、いないんじゃない？」

グリーン、何故そんなにも達観しているんだ。

これが、今どきのヒーローなのか。  
頭脳派なのか。

.....。

タイムスリップしてえ!!!!

「俺、初期でいい。肉体的にきつくとも、男の浪漫に溢れた初期の熱血漢なヒーローになりたいよ。あれこそ、俺の目指す正義なんだ」  
俺の呟きを、グリーンは笑顔で返す。

「5対1で戦う時点で、戦隊物が正義を語る資格はないよ」  
仰るとおりです。

どうやら、現在地は理想のヒーローとは程遠いらしい。

## 裏・第三回目の記録（前書き）

第三回目の記録とセットです。こちらを後に読むことをオススメします。

### 裏・第三回目の記録

これは、俺の知らない話。

「さてさて！今回の議題は、如何にして紅太郎のやる気を殺すか、デス！」

清楚なワンピースを着た愛らしい容姿の少女、否、少年が言う。

ソファーに座りパチパチと拍手をするのは、ショートカットの女性。

「いよおッ！待ってましたあ！今日も可愛いねえ、ももせとおやあ！」

「違う違う！ボクは百瀬桃也！檸檬、モが多いぞ！」  
「モモったら、ラブリイイイイ！」

彼女の横では、空になった缶ビールが山を作っていた。  
どうやら、すっかりデキアガリということらしい。  
ちなみに、今は午前10時なのだが。

「人ん家で、よくそんなにも騒げるもんだよ」

溜め息を吐きながら部屋に入って来たのは、前髪と背が高い男だった。

「あ、葵！ねえ、この部屋ってフィギュア専用なの？すごいね！隣はゲーム専用だっけ？」

「俺の嫁に触ったら殺す」

「冷たいなあ。ボクの女装に萌えてくれたりはしないの？」

「お前が二次元になったら、萌えてやるよ」

彼は、水の入ったバケツを酔っ払った女の前に置いた。

「紀井、小学生のプールの授業のとき、お前はゴーグルする派だった？」

「葵！私には何もかも不要なんだ！」

「それは好都合」

彼女の後頭部を掴み、それをバケツに突っ込む彼。

横で見ていた少年は、えぐいなと思わずにはいられない。

ブハッと盛大に息を吐き出して、彼女が顔を上げる。

その軌跡を水飛沫がなぞり、床へ落ちていく。

「醒めたか」

「ここは何処で私は誰？」

「ここは青南家で、貴女は紀井檸檬サンだよー」

「なるほど。確かに豪華なこの家は、葵の家だ」

「こんなお屋敷、引きこもりたくもなるよねえ」

「別に引きこもっていない。株もチャットも、家でできてしまうだけだ。俺じゃなくて、世の中が悪い」

「ボンボンって変人に育つんだねー」

「ひねくれて育つって言うのよ。で、何の最中だった？」

「明石紅太郎のメンタル面を、如何に潰すかだ」

「なるほど。難題だね」

「やっぱり無理かなあ？」

「考えるだけ無駄かもな」

「私、研究以外で頭を使いたくないな」

そのとき、笑顔だった少年がふと真顔になり、気付いたように携帯電話をいじり始めた。

「何しているの？」

「うーん、電源オフッている」

「なんでよ？」

「危ないよーって、頭に送られてきたんだもん」

「お前、電波だな」

「いや、なんか若葉の声だったと思うよー」

「翠川の声？」

それぞれが、数秒考え、そしてやめる。

めんどくさくなったのだ。

「そういえば、アイツは今日、他人の家と言う名の漫画喫茶に行くって言っていた」

「漫画が読めて飲み物が出てくれば、そこは漫喫なのかなあ？」

「じゃあ、葵には無理ね」

「当たり前だ。俺のバイブルに、指一本も触れさせない」

「ねえねえ、その他人の家って何処だろうねー？」

「モモ、馬鹿ね。無遠慮に荒らせる都合のいい相手って言ったら、そりゃあ」

世界ヲ支配スル我等ニ跪ケ」

突然の機械的歌声。

それは、灰色の携帯電話から流れていた。  
しかし、持ち主は手を伸ばさない。

「葵、どうしたの？」

「このキャラソン、敵キャラのものだ。これに設定した相手、それは…」

そこで着信音は止まった。

そして、

テッテッテッテッテレーレ♪

今度は藍色の携帯電話から、国民的ゲームのBGMが聴こえてくる。

彼女はその表示を見た。

携帯電話をスライドさせる。

そしてボタンを押す。

通話終了ボタンを。

数秒後。

再び同じミュージック。

再び同じボタンのクリック。

三人の声がかぶる。

「着信拒否に設定しよう」

## 第四回目の記録

日曜日。崖っぷち。

俺たち、死んだ敵、少女でトライアングルが成されている。

その少女とは、

「べ、別に助けたわけじゃないんだからねっ!!」

…彼女が登場するまでに、少し時間を遡る必要がある。

早朝。

俺はレンジャー全員に集合をかけた。

そして、なんとか集まった。

…日の暮れた頃に。

「お前ら、ヒーローの自覚があるのか!? 敵が出たら、普通は倒しに行くんだ!! あと、着信拒否にするな!!」

そんな説教をしていた時。

ゴッド・ア・メエエ!

ゴッド・ア・メエエ!

四人がピクリと眉を動かし、口を歪めた。  
見なかったことにして、俺は叫ぶ。

「出動！！」

そんなわけでGPSを頼りに崖に到着。

開けた視界、人気のなさ。

そこには、足を動かさず、上半身を反らしたりして発狂を表現している、ザリガニみたいなナントカ星人が一体。

王道だ。

一昔前の王道だ。

ああ、目の前の敵と語り合いたい。

「よし、みんな！！戦うぞ！！」

しかし、俺のレッドらしい発言の反応は芳しくない。

「いきなり戦うの？野蛮だなあ。まずは和解とかしようよ」

和解なんて禁句だ、グリーン！

「ボク、スカートなんだ。パンチラしちゃう。見学するね」

じゃあ女装するなよ、ピンク！

「お前、俺を誰だと思っている。ニートの体力なめんなよ」

誰もなめていねえよ、ブルー！

「生理二日目だから、お腹が痛いんだよね。だからパスで」

突っ込みづらいよ、イエロー！

「あのさあ！」

説得に取りかかろうとしていた時だった。

「アウチ！！」

叫び声がし、振り向けばナントカ星人が倒れていた。  
そして、その屍の前で剣をしまう少女。

はい。

ここで冒頭に戻ります。

「べ、別に助けたわけじゃないんだからねっ!!」

……ッ……ツンデレ………?

啞然とする俺を差し置いて、背後で四人が暢気に話していた。

「ツインテールじゃん」

「小さいね、背も胸も」

「少し吊り目気味だな」

「ニーハイ履いている」

「お約束、守っているね」

「ちよつと、狙いすぎ？」

「でも、王道は大事だぞ」

「うん、基本は重要よね」

基本が大事とか、お前らが言うな!

と、本当は怒鳴りたい、が。

目の前の少女のキャラに落胆していて、気力がない。

ヒーローに萌えは不要だ。

強いて言うなら、敵の女性が色っぽいお姉さんとか、その程度。

「四人、うるさあいっ!倒したんだから、感謝しなさいよね!」

ああ、もう嫌だ。

そういえば、彼女の立ち位置って何だろうか。  
十秒後、たどり着いた結論に、鳥肌がたつ。

「お前、もしかやブラック？」

俺の細い声を聞いた彼女は、唇の端を吊り上げ、どや顔を見せた。

「そう。ヒロインは私！その他の女の子なんては要らないんだから！  
！そのイエローとかピンクとか！」

「ボク、男なんだけどなあ」

「不要なら、私は消えるよ」

「え？違…ッ！さっきのは、いなくなれって意味じゃなくて…」

こんな色素の薄い萌えキャラが、ブラック…？

…認めない。

「俺は王道しか認めない！！！！！」

「私も激しく同意します！！！！！」

へ？

誰かと思えば、ナントカ星人が手を胸に当てて立っていた。

「わかる！？」

「わかります！！」

「メル友になろう！！」

「はい！赤外線できます？…でも、こんなの、邪道でしょうか？」

「そうかも。でも、俺、それ以上に君のアドレスが知りたいんだ」  
「し、仕方ないわね。そこまで言うなら教えてあげてもいいけど」  
「……………え？」

「これで口説けたとか、勘違いしないでよねっ！！」

その日。

同志と問題児のデータが、俺のアドレス帳に追加された。

## 第五回目の記録

「ええっと、こちらの方が」

「烏丸クロ。ブラック役よ」

「はい、そういうわけで、仲間が増えたことにより、俺たちの活動は大規模化できるわけだ。みんな、これからを話し合おう。子どもたちの未来の為に！」

久しぶりのアンダー・ザ・ブリッジ。

もちろん、ダンボール箱の椅子である。

ただし、今回その箱の上に立っているのは俺ことレッドではなく、ブラックの少女。

今日も、ミニスカにニーハイ、ツインテール。

前へならえの先頭よろしく、腰に手を当てている。

彼女の参加により、椅子がなくなり、俺は地べたで体育座りしていた。

実は少女のパンツが見えてしまっているのだが、クマ柄を見せられては、卑しい考えも浮かばない。

そもそも、戦隊物を見るのは小学生男子！

スカートめくりが限界なほど、純情でなくてはならないのだ。

二時間サスペンスで動機になるチジョウのモツレなど、知らなくていいのだ。

それにしても、生物存続の本能から殺人が起こるって、本末転倒な気がしなくもないな。

まあ、俺には悲しいほどに無関係だが！

ああ、話が逸れる。

しかも、俺の恵まれない異性関係の話になる。  
やめよう。

戻ろう。

さて、今回は、俺たち5人組のレンジャーにブラックを含めた初めての集会だ。

記念すべき第一回なのだ。

今後に関わる重要な会だ。

しかし。

「グリーン、新聞の将棋やるのをやめろ！ピンク、そのイヤホン外せ！ブルー、表紙からして子どもに悪影響そうなラノベを読むな！イエロー、そんな大量にパンを食うな！」

相変わらずの無気力っぷり。

「これ、脳の老化を防ぐ為なんだよ」  
「これ、話題の映画の挿入歌なのに」  
「これ、来期のアニメの原作なんだ」  
「これ、消費期限が迫っているのよ」

もう、こいつらは無視しよう。

静かに聞いていることにしよう。

「頭の中で都合の良いように置き換えているから、お前ら黙っとけ」

俺の発言に、四人が一斉に反応する。

自分の座っていたダンボール箱ごと、素晴らしい勢いで後退し、俺との距離を確保する。  
何故？

「都合良くって、つまり、僕は脳内で性転換させられるということか！中学女子の発展途上な体を想像するんだね！？その思考、犯罪者の第一歩だ！」

「お前の思考がな！」

「じゃあ、ボクは脳内でコスプレさせられるってこと！？メイド服とか！あ、す、スク水とか！いやあ！！そんな変態オヤジみたいな妄想、やめてよ！」

「お前のが変態だ！」

「そりゃ、お前はモテないのかもしれない！けれど、だからと言って、男に走るのはどうなんだ！BLなんて…ましてや、お前が相手とか…オエエツ」

「ブツ飛びすぎだ！」

「ああああ！私、脱がされる！いや！逆かも！？年上の美人さんに脱がされたいなウヘヘ、とか思っているのかもしれない！不純！不潔！不健全！」

「お前、黙れよ！！！！！」

「何、アンタ、そういう奴なの…？」

…また厄介なことに…。  
涙が滲んできましたよ。

「違っんだ、あの」

「いや！触らないで！」

バチイイイイインツ！！

わお。

ナイスヒット。

なんか景色がマールブル模様だ。

そう思った途端、俺の体は無様に後ろに倒れた。

「ブラックが倒したよ！」

「ブラック、すごおい！」

「流石だな、ブラック！」

「ありがと、ブラック！」

「え、べ、別にアンタたちの為じゃないけど…、ふん、悪い気はしないわねっ」

斯くして、俺の左頬の腫れと引き換えに、彼女は四人からの信頼を手に入れたようだった。

## 第六回目の記録

ファストフード店にて、大学二年の俺は、三十二歳の銀行員と向かい合う。

「正義の為に戦いたい」

「素晴らしい！」

ファストフード店にて、レッドである俺は、ナントカ星人である彼と向かい合う。

着ぐるみを剥げば、一般人。

そんな彼とは、頻繁にメールをする仲。  
一番の理解者。

「四人が、意味不明なんです」

「詳しくお話してください」

「愚痴ですよ」

「子どもの憧れを引き継ごうする若者に会えたこと、本当に嬉しいんです」

彼は、俺の手を包むように握った。

「私は全てを受け入れますよ」

少し、口説かれた気分。

カウンター席の四人組が今の言葉を聞いて、こちらをチラリと見たのは、見なかったことにしよう。

「まずは、グリーン。中学三年なんですが、爺臭いんです」

「若々しいエネルギーが売りでもある戦隊物の、爽やかな癒しの立ち位置のグリーンが！」

癒しと言えば、癒しだろうか。

少なくとも、本人はいつも寛いでいる。

「次に、ピンク。高校一年なんですが、男の娘なんです」

「男の子？女の子が王道でしょう！高校生じゃ、もう男臭い男でしょう！あー、見たくない！」

絶対にコの漢字の変換が違うのだが、あえて気にしないでおこうか。

「次に、ブルー。株で生活しているニートのお坊っちゃまで、オタクです」

「そんな何の教訓にもならない経歴の人が、冷静担当のブルーなんですか！断固反対ですよ！」

いや、冷静と言えば冷静だ。

格闘ゲームや悶えている最中以外は。

「最後に、イエロー。国立大学の院生なんですが、理系で、我が道を行っています」

「イエローは馬鹿で元気でアップダウンの激しい文系でしょう！そんなの、認められません！」

しかし、酒や寝起きなど、意識のあるなしでのアップダウンはある。

「大変だったんですね。私が、その隙間を埋めます」

「駄目です！だって、俺たちの関係は」

「ぎゃあああああ！！！！」

叫び声。

例の四人組だ。

ひそひそ話している。

ポソポソ漏れてくる。

「B L だよ。僕、初めて見ちゃったよ」

「ねえねえ、どっちがどつちかなあ？」

「俺的にはリアルは不要なんだけど」

「年上、攻めてるっぽかったじゃん！」

あれ？

「お前ら……」

もしや。

「はい。翠川若葉です」

「百瀬桃也ですよー」

「青南葵だが、何か？」

「私は紀井檸檬だぞ！」

俺は、ツッコミにあるまじき行為をとった。  
つまり、絶句。

「君たちが戦隊のメンバーか！でも、さっきまでの話と違うような？」

「えっ？もしかして、レッドくん疲れているのかも。大丈夫？薬とか、いる？」

抹茶シェイクを手に、グリーンが言う。  
絶対に演技していやがる。

「そうなの？つと！わ、アツツい！」

アップルパイをこぼした指を、ピンクは舐めた。

その様子を、近くの男子高生がうつとりと見ている。  
もちろん、彼は今日も女装中。

「俺、抜けるぞ。本屋に行く。待たせている奴がいてね」

コーラを吸いながら、ブルーが立ち上がる。

予約していた限定版の漫画を取りに行くのだろう。

紙の上の萌えキャラなど、一生待たせておけ。

「ハンバーガーの包装紙、研究したああい！その為には、もっと必要！もっと食べる！」

注文しに、イエローがレジへ歩く。

ああ、酒を飲んでいる。

顔は赤くならないが、頭はおかしくなるといっ、いつもの酔い方だ。

しかし、これで彼にも四人の実態が暴かれた。

そう思っていると、彼の手が肩に置かれた。

そして、笑顔で一言。

「今までののは、君の杞憂だ」

暴かれた…はずだったのに。

レッドはつらいよ。

## 第七回目の記録

「明日、何の日だと思う？」

俺ことレッドの発言に、五人は訝しげな視線を送る。

「あんた、気持ち悪いっ！」

「面倒な彼女の台詞っぽい」

「でも、レッドと交際は…」

「うん。強く強くお断りだ」

「うんうん………ぐかあ」

いつもながら、泣きそうだ。

本日は俺の家に主なヒーローに加え、ブラックが集合。

ブラックは今日も仁王立ち。

グリーンは椅子に座り、足を組み、本を読んでいる。

ピンクはベッドに寄りかかり、冷蔵庫から勝手にエクレアを取ってきて、食べていた。

ブルーは壁に寄りかかり、ぶつぶつと言っている。

イエローはベッドにもぐり、寝ていた。

俺はというと、床に正座。

気分は罪人。

「問題を出したんだから、盛り上がるとか当てるとか…」

「はい」

手を上げたのはグリーン。  
始まったようで一安心。

「どうぞ」

「明日は僕の誕生日」

「違…って、ええ！？サラリと！おめでとう、  
うわあ、やっぱり、おめでとう！」

「ありがとう。嘘だけどね」

「…………え？」

「じゃあ、はいはい」

食べ終わったピンクが、女の子のような手の上げ方をする。  
女装中で違和感がないのが厄介だ。

「じゃあって何！この流れのまま来るの！？そうなの！？」

「ボクも誕生日」

「なんて捻りのない嘘！」

「ほら、次は俺だろう。指せよ」

舌打ちをしてブルーが言う。

本当に、今日の彼には近付きたくない。

「何、この態度！」

「あ？ボケねーぞ？」

「その方が有り難い！！嫌いな声優が好きなキャラを演っていたか  
らって、俺に当たるな！！」

「ここ三ヶ月、俺はあの映画を楽しみに生きていたんだ！それなの  
に、それなのに…うう」

「泣くなあああああ！！！！」

「はいよ」

いつの間にやら起きていたのか、布団からイエローの手が上がる。

「はい、どうぞ」

「私たち結成、約一年の日」

「あ、当たり前！だけど、約って要らない！」

「そうなの？」

ブラックが腕を組んで近付いてくる。

またパンツが見えるんですけど。

それを回避する為、俺は視線を上げる。

まともに目が合った。

途端に、彼女の顔は真っ赤になる。

「じ、ジロジロ見ないでよねッ！気持ち悪いッ！」

「いや、ごめん。ただ」

「ただ、何よ？」

「顔が赤いから」

彼女は顔に手を当て、くるりと回れ右をする。

その瞬間、俺は視界に入ったものをつい口に出していた。

「今日はウサギなんだ」

…まずい。

しかし、彼女は理解していないようで、キョトンと大きな目をこちらに向けていた。

そのとき、いつもの如く、空気を見捨てる声が聞こえてくる。

「ここ、ウサギはいないよね」

「雑貨にも、いないけどねえ」  
「…ウサ…ヘアピン…アニメ」  
「浮かんだことじゃないの？」  
「またエロ妄想していたのか」  
「ウサギコス、拒否するよう」  
「…萌えに燃えだ…フヒヒ…」  
「もしくは、私たちに死角の所に見えたか」

彼らがブラックを見る。  
俺もブラックを見る。

真っ赤。  
その色は俺の物なんだが。

ピンチの予感。

「覗いたのかしら、スカートの中？」  
「ええと」  
「バカあああ!!」

足が凄まじい速さで飛んでくる。  
違う。

飛んできているのは足ではなく、彼女。  
これはただの回し蹴りではなく…。

「お嫁に行けなくなっちゃうじゃないッッ!!!!!!」  
飛び蹴り。

いや、お嫁には行けるかと思われます。

記念パーティーの提案をしたかっただけなのだが、こうなるのは何故だろう。

くそう。

こうなったら、意地でもパーティーをしてやる。

## 第八回目の記録

さあ。

とあるホテル。

セッティングされたパーティー会場を見て、俺ことレッドは満足に一人で頷く。

まさか、ここまで豪勢になるとはな。

どうせ彼らは出さないだろうからと、言い出しっぺの俺が多目に出費した。

それを見て、彼らは言った。

「参加費用、それくらいなんだ」

そして見事に全員が金を出した。

グリーンは俺には及ばないながらも、中学生としては異常。

ピンクの金は俺を越え、高校生として異常。

ブルーは俺を軽々と越え、本当の本当に異常。

イエローは金額を言っていないしチラリと見ただけの俺の金額と、そっくり同じであることが異常。

しかし。

「んなッ…そ、そんなに出不さないわよ。出せないわけじゃないんだからねッ！」

そう言つて、五百円玉を叩きつけるブラックに、小学生かよ、と突っ込みつつも、何だか安心した。

そうだ。

俺の金は少くないぞ。

頑張ったぞ、俺。

「何ニヤニヤしているのよッ！バカ！」

蹴られたけど。

そういうわけで、今日はいよいよパーティー当日。  
戦隊結成一周年記念パーティーだ。

多分、そろそろ来ると…。

「お、意外に大丈夫かも」

「うん、大丈夫そうだね」

「何とか大丈夫みたいだ」

「大丈夫と信じておこう」

ぞろぞろと、いつもの四人が入ってくる。

「あのさ、お前ら、大丈夫って何が？」

「レッドのセンス」

見事にカルテットだ。

うん。

認めたくはないが、俺にしては良い結果を出せた。

そりゃ、あれだけの金を前に、奮い立たない人間はいない。

「ふうん。なかなかじゃない」

ブラックも、腕を組ながら現れる。

ほう。

五人とも、きちんとしたホテルに来るだけあって、いつもよりきちんとした服装をしているような…。

「あれ、グリーン。それって、もしかして中学校の制服だったりするのか？」

「うん。午前中は土曜講座で学校だったんだよ。面倒だから、そのまま来た」

「洒落ているんだな。ブレザーか。俺は六年間、詰襟だった」

「ああ、レッドはやっぱり公立か。だよな。だろうね。ハハ」

薄ら笑いするな、私立中学生。

「ピンクは、うん、いつも通りだよな」

「えへへ。おニユーのワンピなんだよ」

「相も変わらず、似合うな。困るほどに」

「ふふふ、当たり前！。惚れないでねっ」

じゃあ、女装しないでね。

「ブルー、やれば出来るんじゃないか。意外だ」

「当然だろう、アホ」

「いつもはだらしのないのにな。前髪、切った？」

「ワックスだ、アホ」

その語尾、傷付くからやめろ。

「イエロー、なんか若く見えるよ」

「私、レッドは恋愛対象外だけど」

「今更だけど、背、割りと高いよな。なんかスタイリッシュだ」

「どうせ、黒の、ヒールとジレとシヨールパンのせいでしょう？」

…ジレって何だ。

「ブラックは、ああ、やっぱり今日もお約束なのか」

「何よ。何か文句でもあるわけ？蹴られたいわけ？」

「違います。ただ可愛い格好だなあって」

「かっかかかわいい！！？」

「うん。かわ、ゲフツ！！」

おい、待て。今は何故蹴られたんだ、俺。

何はともあれ、パーティーがスタートする。

## 第八回目の緑

彼にしては、瀟洒なホテルを選んだな。

そんなことを感じながら、僕こと翠川若葉は停車したバスから、そのホテルを眺める。

「若葉くん、こんな所に知り合いがいるのかい？」

運転席で、初老の男が言う。

彼は、伯父の専属の運転手。

今日は暇だからという理由で、僕一人を送迎してくれるのだという。祖父が大地主のようで、翠川家はなかなかの金持ちなのだ。

「知り合いと言うか……。たまに、知人であることが悲しくなるんだよね」

「ほお。まあ、若葉くんは愛想はいいからな、きつと大丈夫だろうよ」

そう。

明石を相手に、外面なんて始めから使わなければ良かった。結局、面倒で意味不明な今に至るのだから。

「まあ、あの大学生、漫画を貸してくれるからいいけどさ」  
「大学生ならば、漫画より、良い本を借りたらどうだい？」  
「無駄。僕は、あの人の小説の趣味を疑うね。有り得ない」

いつまでも長話をするわけにはいかない。

車を降り、ホテルへ向かう。

自動ドアをくぐると、見知った顔があった。

「翠川？」

「あ、須田」

クラスメイトだ。

「お前、一人で泊まり？」

「夕飯を食べに来ただけ」

「俺の家に来るとはねえ」

こいつはホテルの息子だったのか。  
興味がないから、知らなかった。

とりあえず、ロビーのソファに体を埋める。  
足も組む。

須田に言った。

「抹茶が飲みたいな」

しかし、彼はポカンとしたまま動かない。

「客の喉が干からびてもいいの？」

彼は頭をポリポリと掻いた。

「現在地の主が現れたら、人は大概、謙虚になると思う」

その言葉に吹き出したくなる。

堪えても無駄で、ついに盛大な音を出して僕の空気は放出される。それに引つ張り出されるように現れた笑いに、身を任せた。

「な、なんだよ」

そのとき、狼狽える須田の後ろから、見慣れた姿が駆け寄ってきた。

「若葉」

ピンクこと百瀬桃也である。

今日も見事に女装中。

須田が見惚れているような…。

ま、いつか。

人の誤解を眺めるのは楽しいし。

「わ、ブレザー」

「学校帰りだね」

須田の縋るような視線を感じる。

この美少女は誰だと言わんばかり。

大変だ。

本気で面白いぞ、これ。

「あ、そういえば、お話し中だったよね。邪魔しちゃってごめんね」

モモが須田に垂れ眉の表情を向ける。

彼女…否、彼の恐ろしいところは、こういう行為が天然であること

だろう。

案の定、赤くなり慌てふためく須田。

ここに明石がいたら、俺の色を取るな、とても言っただろうな。

うわ、見たくない。

おおっと、想像しない。

想像しない。

気を取り直して。

「ね、何か飲みたいね」

「もうカラカラだよ」

会話を聞き、即、彼は奥へと走り出す。

その背中に話した。

「現在地の主って言ったけれどさ、ここって僕の爺ちゃんから買った場所でしょ？」

現在の主は須田家であるから無意味な攻撃かと思いきや、彼はピタリと停止した。

壊れた機械のように振り向く彼に、僕は極上の笑みを見せる。

「抹茶の上に、抹茶アイスが欲しいかも」

## 第八回目の桃

ソファ―に座って盛大に伸びをする。  
気持ち良いなあ。

「若葉の友達のホテルなんだね。おまけとか、してくれるかなっ？」  
「友達とも言えないけれど、モモが言えばしてくれるんじゃない？」  
「やっぱ、彼もボクに惚れた？」  
「もう明らかに、そうだったよ」

うーん、ボクは少し罪深いかもしれないなあ。  
なんで男にモテるんだろう。

唇を突き出しながら、考える。  
ソファ―の上で足をパタパタさせた。

「そういえばさ、モモ、あの参加費はどう出した？」  
「ああ、あれのことかあ。あれは損害賠償、的な…」  
「損害賠償？」  
「痴漢だよ」

払う二日前のこと。

空席の多い電車に乗っていると、わざわざ隣に座るおじさんが現れた。  
さらには太股に手をのせ、擦ってくる。  
その手が下に潜ろうとした瞬間、ボクは叫んだ。

「ちかあああああぁんっ！」

なかなかの音量。  
演劇部だもん。

そして、その声で近くにいた大学生らしき人が駆け付け、おじさんを捕まえてくれた。

「どうしますか、次の駅で警察に突き出しましょうか」

大学生は使命感に燃えるように言った。

「いえ、結構です。でも、本当にありがとう」

微笑みを見せた。

大学生が名残惜しげに降りると、車両にはボクとおじさんだけになった。

気まずくて逃げようとする裾をつかんで、引き止める。

「ねえ、おじさん。見て見て」

ボクはスカートを一瞬だけ、めくった。

おじさんは絶句する。

「おじさん、こんな汚点は消したいよね。だから、今後は女の子に痴漢しちや駄目だよ？」

おじさんはわたわたと動き、財布を漁った。

そして、ありったけの札束をボクの手には押し込んだ。

「え、いらないう」

「これで忘れてくれ」

おじさんは次の駅で降りた。

代わりに乗り込んできたのは、先程の大学生だった。

「あれ。さっきの人ですよ？ありがとうございます」

「いえ。そんな…ボクは当然のことをしたまでです…」

彼の熱っぽい目を見て、何となく再び乗り込んできた理由に見当がつく。

「あの、俺」

「えいつ！」

彼の口が動いた瞬間、飴を投げ入れた。

彼は驚きを隠せない様子。

「勇気を出すのはえらいけど、簡単に言っちゃ、言葉の重みは減っちゃいますよ？」

口に人差し指を当てて、ウインクする。

何故か、彼はふらついた。

「ついでに言えば、ボクは簡単には揺れませんからねっ。ではでは、さよならー！」

ホームに降り立つ。

電車の中で、彼はまだ頬を赤くしていた。

そういえば、投げたあれは最後のレモン味だったかも。  
残念だなあ。

まあ、いいや。

これと貯金を足せば、パーティーの参加費は足りるし。  
帰ろっかな。

「…と、いうわけですよ」

「モモらしい。流石だねえ」

「へへっ。ありがとうね！」

「痴漢、許しちゃったの？」

「うーん、面倒だったし…」

「それは、もったいないな」

「若葉なら、どうしたの？」

「僕だったらか。そりゃあ」

彼はあどけなさを残す容貌で、年相応の笑い方をして、言った。

「いたぶるよね」

## 第八回目の青

ロビーに入ると、既に二人が到着していた。  
翠川と百瀬だ。

「あ、来た来た」  
「葵ー。やほー」

ソファで寛ぐ二人と、その横で無意味に突っ立っている男子が一名。

おい、どういう状況だコレ。

「これ、何？」

男を指差しながら、聞く。

「ああ、それは僕のクラスメイト」  
「これ、お前が連れてきたのか？」  
「その実家がこころしいんだよ」

なるほど。

それにしても…。

「おい、お前」  
「須田です」  
「須賀、お前」  
「須田です」

どうでもいい。

「こんなんが実家なのに、よく出ていられるよな」

「…………へ？」

「へ、じゃねつつの。こんな小さな家、恥だぞ恥」

「あ、あの……」

「明石は、趣味が悪すぎる。道理で参加費が安い」

翠川はニヤつき、百瀬はクスクスと笑っている。

何がおかしいんだか。

「須賀、せめてリトル・ロイヤルくらいにはしろよ」

「須田です！！てか、そんな高級ホテル、無理です！！」

「それなら、ビッグ・エデンを見習えよ」

「はい？それは、何処のホテルですか？」

「知らねえのかよ。アキバのマン喫だよ」

「ホテルじゃないっ！！」

「ホテルだ。泊まれる」

「ホテルじゃないっ！！」

全く。

馬鹿には常識も通じないのか。

「とりあえず落ち着きなよ、青南先輩」

「そつだよ。須田くん、困ってるし」

その言葉に須賀が素早く反応した。

そんなに助け船が嬉しいのか、天使を見るように二人を見る。

否。

百瀬を見ている。

「リアルのBLを観戦しても、つまらないな」

「先輩、眩きが唐突すぎるんだ。自重してよ」

「自重することを自重する人だもんねえ、葵」

自嘲？

「自分に軽蔑すべき部分がない」

「そう言える二ート、先輩だけ」

「漢字変換が違うと思うよお？」

自重？

「自重って自分を愛することか。存分にしているぞ」

「僕的に、言動を慎むの意で解釈して頂きたかった」

「葵と同じ人間なのか、ボク、たまに疑っちゃうよ」

こっちの台詞だ。

本当は、三次元ではなく二次元の住人になりたい。

「あ、先輩も何か飲めば？」

「そう言えば、そうだねえ」

見れば、二人の前には抹茶フロートとキャラメルカプチーノ。

「じゃあ、コーラ」

「はっ……はい？」

「何、ないわけ？」

「いえ、あります」

須賀の驚きの理由が、わからない。

なんなんだ、コイツ。

「あ、わかった。先輩が庶民的で一般的な注文をしたからだよ」  
「そっかあ。ブルジョアもコーラを飲むんだあってことだね？」

庶民的で一般的？

いつもの俺だろ、ソレ。

常時ソレだろ、俺。

「須田、シャンパンとか予想した？あははっ」

「でも葵の好みって、少し子どもよりだし…」

何を言うか。

アルコールは飲める。

しかも、酔わない。

ただ、サイダーとかコーラとかの方が好きだ。  
糖分がドパドパ入っていますって感じる、あの味が。

ちなみに、ファミリーストランで最も旨いのは間違いなく、お子  
さまランチだと思う。

俺の好きなものしかない。

もはや、俺の為の食べ物としか思えない。

「とにかく、須賀、早く持ってこい」

「須田ですっ！！！！！！」

## 第八回目の黄

眠い。

異常に眠い。

畜生。

結成一周年記念パーティー！。

絶対に来ようと思っていた。

パーティーだ。

つまり、パーティー！。

パーティーといえば、もちろん酒！

アルコール！

酔えるぞ！

楽しみだ。

楽しみすぎて、昨日も一人で飲み、寝坊し、研究室へ走り、研究を始めれば没頭し、終了した途端に寝不足による睡魔が襲ってきて。そして、今、とてつもなく眠い。

目を擦りながらホテルの自動ドアを潜ると、ロビーで寛ぐ三人が見えた。

「あ、檸檬さん来たよ」

「ハロー、イエロー！」

「紀井、少し遅刻だな」

「あ。もしかして、ギリギリまで研究していた？」

「服装、素敵！クール系も、ボク、着よかったあ」

「ほら、とりあえず、早くエレベーターに乗るぞ」

そうやって四人で乗り込んだときだった。

「あのっ！」

閉めるボタンに伸ばしかけていた葵の手が、停止する。

声の方を見ると、一人の少年がオロオロしていた。

誰？

「須田、君は従業員だから、パーティーに関係ないよねえ？」  
中学生と思えないふてぶてしさで、若葉が言う。

「閉まるドアには気を付けるべきだよ。で、何かお話が？」  
首を傾げ、口元に手をやり、瞬いて桃也が言う。

「つか、この指が行おうとしていたこと、続行していいか？」  
舌打ちを交えながら、彼を見下ろして葵が言う。

全面的に、三人に賛成だな。

私は、指を『閉』へ伸ばす。

それを少年が慌てて止めた。

「ちょ、ストップストップ！」

「何なのよ。そして、誰なのよ。ゴキブリを擬人化したみたいな顔して」

「何ですか！その斬新で残酷な例え！」

「知らないようだから言うけれど、理系だって比喩はできるんだからね」

「今そこに論点を持っていきますか！」

「とにかく解放して。今すぐアルコールが欲しい気分なの。飲みたい」

私は指を伸ばし、ボタンをクリックした。

閉まるドアから、彼が更に手を伸ばそうとしている。  
瞬間、顔あたりをヒュンと何かが過った。

それが少年の顔面にヒット。

「閉まるドアにご注意下さい」

後ろで、若葉の愉しげな声がした。

「若葉あ、何を投げたの？」

「スクバに常備中の広辞苑」

流石は若葉。

やることの攻撃力が、いちいち高い。

それにしても、広辞苑をスクールバックに常備とは如何なものか。  
重いだろうに。

安っぽい音がして、エレベーターは目的の階へと到着した。  
暫く廊下を進むと、貸し切りと示された部屋がある。  
そこで、私たち四人は止まったら。

「つまり、ここだよね」

「ここなんだろうねえ」

「ここしかないからな」

「ここで確定だろうね」

さて。

「この中は危険だろうと思う人ー」  
四本の手が綺麗に挙がった。

「少し帰りたくなっちゃった人お」

四本の手がソロリと拳がる。

「でもガツガツ飲み食いしたい奴」

四本の手が素早く拳がった。

「紅太郎が期待できるって人は？」

四本の手は全く動かなかった。

いやいや、胃袋の為、食の欲を満たす為、そして私は何よりもアル  
コールの為に。

「よし、一斉に行こうか。僕らは運命共同体」

「そうだよねっ。きっと、大丈夫だもんねっ」

「信じる者は救われる、と某キャラも言った」

「中には、酒があるんだもんね。よっしゃ！」

私たちは扉を開ける。

いざ、パーティーだ。

## 第八回目の赤

八人だけだというのに、パーティーはなかなかの賑わいを見せた。

……………そう、八人。

「やはり、私は帰るべきでしょうか。内部に三流の敵が侵入するなど、烏滸がましいことをしてしまつて」

「いいんですよ、ナントカ星人さん。ヒーローは勸善懲悪。敵さえ改心させるのです」

「ああ、レッドさん！なんとという綺麗事！流石、子どもの夢！」

八人とは。

「勸善懲悪視機関についていう、歌舞伎の脚本があつたつけね」

「完全腸悪？もしかして、コウ、お腹を壊しちゃったの？」

「勸善懲悪は、萌え要素が必須だ。戦い中のパンチラとか」

「勸善懲悪って、略したらカンチヨウじゃん。洒落かね？」

いつもの四人、プラス。

「な、その赤色！簡単に人の手を握つてんじゃないわよ！…わ、私とは手を繋いだこともないくせに…」

ブラックこと烏丸クロ、プラス。

「……………」

「……………」

「お前は、誰？」

「あ、須田です」

須田と名乗る少年が一名。

誰だろう。

まあ、いいか。

そして、俺とナント力星人である銀行員。

俺はレッドらしく、指揮をとる。

「よし！今日はパーティーだ！存分に祝うぞ！ちなみに、未成年、アルコール禁止だからな！」

「うええっふへええい！」

焼酎の瓶を片手に、イエローが返事をした。

「：成年も、ほどほどにね」

「そういや、さっきから烏龍茶ばかりだけど、アンタは成人しているの？」

いつの間にか近付いていたブラックに聞かれる。

彼女は不貞腐れた表情で、オレンジジュースの入ったコップを、両手で包むように持っていた。

不釣り合いな空気が、なかなか可愛らしい。

「ん。今年で二十歳。だから、まだ」

「ふうん。十九なのね。三歳差だわ」

「へ？もしかして、ブラックって十六歳か？」

「高二、今年で十七。何よ、何か文句でも？」

「俺はてつきり中学生かと…」

「中学生！？い、一応、クラスで一番低いわけじゃないんだからッ！」

…いや…、パンツの趣味とか、バストのサイズとかが。と言ったら、蹴られるのかな。

「高校生と言えば、ピンクもだよな？」

殺気から逃れたくて、俺はショートケーキをつつく彼女、否、彼に話し掛ける。

「そお。ボクは高三だから、一歳おにーさんなんだよー」

ゆるりとしたウェーブのある髪を弾ませて、はにかみながら、出てくる単語はオニーサン。  
残念すぎる。

「じゃあ、変わらず、僕が最年少か」

「そして、変わらず、俺は最年長な」

グリーンとブルーが、呼んでもいないのにやって来る。

雑穀茶漬けを手にした少年と、バランス栄養食を手にした青年。

「お前ら、今日くらいはマシなチョイスをしてくれ！」

「内臓を思いやっているんだよ。もう若くはないしさ」

「不味いホテル食より、格段に良いチョイスだろうが」

「せっかくの俺セレクトの素敵なバリエーションが…」

「大丈夫。制覇してくれる人が背後に約一名いるから」

「さつき、既に半分は制覇していた。恐ろしい限りだ」

俺は振り返る。

凄まじい勢いで食べ物を胃に詰め込んでいく、イエローの姿。  
あいつ、酒だけではなかったのか。

パーティーと言えど、変わらぬ、いつもの様相。  
果たして、…俺の努力の意義は？

## 第八回目の黒

なんなの、本当に。

パーティー真っ只中。

私こと烏丸クロは、足を組んで料理を頼張っている。

…鶏肉、うまい。

「あ、それ油琳鶏だよ。僕も食べよう」と

いきなり、隣にすんと着席する男の子。

均整のとれた顔立ちに、あまり高くはないけれどしなやかそうな体。べ、別に惚れたりしないけど。

ええと、確か、グリーン of 翠川若葉だったっけ。

レディに断りもなく座るとはね。

まあまあカッコいいけど。

なんか、こいつは気に食わない。

まあまあモテそうだけど。

……あ。

チャンス？

ずっとしたかった情報収集、今すればいいんじゃない？

「ねえ」

グリーンがこちらを向く。

大丈夫。

聞きたいことは一つだもん。

軽いノリで。

「あのピンクってどんな人？」

違うッ！

自分、違うでしょうがッ！

「モモのことかあ」

彼は笑った。

直感で気付く。

こいつ、私が違う質問したかったの、見破っている。  
うっ……く、悔しい。

で、でも！

ライバルかもしれない奴のことを探るのも必要だもんね！

「モモは可愛いし、優しいし、よくモテるし」

「モテる？どれくらい？」

「僕と同じくらい」

あっそ。

「コウも、モモには甘い気がするなあ」

……………え。

嘘でしょ！？

ああ、ライバル確定だわ！

「じゃ、じゃあ、イエローは？」

もう一人のライバル候補を訊ねる。

今はただの酔っ払いだけれど、こっちも油断ならない。

私にはないものを持っている。

年上のオネーサンっていうステータスとか、背とか、胸とか、胸とか、胸とか。

「檸檬サンの寝顔なら、コウは飽きるほど見ているんじゃないかなあ」

はああああああ！！！！？

「嘘！」

「事実だもん」

「嘘！」

「そんなことより、まだチェックすべき人物がいるでしょう？」

「へ？」

「ほら」

指差された先には。

「レッドさん。この料理、お取りしましょうか？」

「あ、じゃあ、この皿に。すみませんね、なんか」

「いえいえ、お気になさら…、ずううううう！！」

「え、あ、あの？」

「ゆ、指が触れてしまいましたあああ！て、敵の分際で！ああ、死にますから許してください！」

「その程度！？大丈夫！大丈夫ですから！」

「ほうら、すつごく仲良し」

彼がまた苛立つ笑みをを見せていたけれど、私には関係ない。  
立ち上がる。

鶏肉が落ちたけれど、私には関係ない。  
ダッシュする。

何よ。

何よ何よ何よ！！

「私だってイチャつきたいんだからあああ！！」

飛翔。

狙いを定めて、足に神経を集中、そして回転。

「へ？」

今更に私に気付いた、レッドのアホ面。

…うわ、よく考えると至近距離だ。  
とか！

今は関係ないんだってば！

「馬鹿あああ！！」

「うがあああ！！」

叫び声と共に、鈍い音。  
私は着地する。

なんなの、本当。

こんなにダッサイ男なんだから、ライバルなんていらぬのに。

「前途多難だね」

グリーンの弦きが聞こえた。

「ちなみに、コウに彼女はいないから」

その情報に、つい振り返る。

彼がニヤニヤしていた。

「質問したかったのって、これでしょ？」

## 第八回目の追記

腫れた顔面を擦りながら、俺は片付け中。

見事に俺しか残っていない。

そもそも、ホテルなのだから、こういうことは客がしなくても良いのではなからうか。

…まあ、いい。

こつこつ星のもとに俺は生まれたんだチクショ！。

「あのう」

声に驚いた。

思い出す。

須田とかいう少年がいたんだった。

誰だか知らないけれど。

「何？」

ああ、和むなあ。

会話の一言目って、やっぱり謙虚であるべきだよなあ。

普段、一言目から命令されたり、反抗されたり、暴力を受けたり、そういうのに慣れちゃったから……………。

……………。  
慣れるなよ、自分。

「あのですねえ」

もじもじしている少年にピンと来る。

「あ、えつと、一応聞きたいんだけど、誰？」

恋。

恋だ、これ恋関連だ。

しかし。

ここで無闇にキャツキャツしてはいけない。

一つ目、キャピキャピした俺は気持ち悪い。

二つ目、少年が惚れる相手として一番可能性が高いのが………  
明らかにピンクであること。

だって、そうだろう！？

イエローは、はしたなく食べまくっていた酔っ払い。

ブラックは、パンツを晒して人に顔面キックをした。

残るは、あの超絶に可愛い男の娘しかない。

「そのう、黄色いワンピースの人が……」

ほらアアアッ！！

え、俺にどうしろと？

男なんだよ、そう言ったところで信じてもらえるはずがないだろうし。

かと言って、誤魔化して、幻想を長く抱かせるのは俺の良心が痛むし。

うわあうわあうわあ。

どどど、どつしよう。

…やっぱり、此処は…。

「あ、アイツは男なんだよ」

空白。そして。

「は？」

限りなく『濁点の付いたア』に近い『ハ？』。

泣きそうです。

いや、負けたらいけない。

「つまりはですね、女装をしているのであって、生物学上は男性とされている人間なのですよ、ハイ」

中学生に敬語を使う大学生ですよ、ハイ。

「そんな…」

絶望していらつしゃいますね。

悲しさ、悔しさ、わかります。

俺も…何度疑ったことか…。

ああ、涙がちょちょぎれます。

「で、でもですね。他の女性は女性ですから。あの背の高い人は如何ですか。美脚ですよ。あの胸が貧し…控えめな女の子は如何ですか」

各種、取り揃えております。

「……………嘘だ」

「…本当です」

「嘘だああああ！！」

少年はわんわんと泣き始めた。

あ。

なんか、この少年に親近感。

実は、俺もピンクに一目惚れした後に事実を知った一人。

少年は鼻水混じりに喋り出す。

「が、学校でも、ぐず、翠川って一番が定位置って感じなんですけど、ズズッ」

ああ、同級生なのか。

「勝てるどころなんて、友人の多さくらいだと思っ、ぐず、ていたのに、ずび」

ああ、確かに友人は少なそう。

「なんか知らないところで、交遊関係がある、ぐず、とか、格好いいじゃん！しかもあんなイケメンと並べるとか！」

.....。

並んでいたイケメン？

...ブルー...？

「イケメン？」

「イケメンですよ！なんかストイックな感じで！」

.....第一印象って、本当に大事なんだなあ。

被害者を増やして、パーティーは幕を閉じる。

## 第九回目の記録

「初心に帰ろうと、そう思ったんだ」

俺は段ボールの椅子に腰掛け、精一杯の威厳を出す為に足を組んでいる。

これを含め、六個の段ボールが、土手で円を描いている。それぞれに、グリーン、ピンク、ブルー、イエロー、そして無人。

「爺臭いねえ」

自販機で買ったお汁粉を飲みながら、グリーンが言う。

それは、お前だ。

「問題が、山ほどあるんだよ」

「そお？ボクは、問題ないと思うよ？」

「…ピンク、たとえば、君が最近遅刻しないのは何故だと思う？俺が予定の時刻の一時間前で知らせているからだよ？」

「えっ？だって、ボクが来るあたりって皆が集まる時刻ぴったりにらいだよ？」

「だから、それが問題なんですよーがッ！ー」

「そつかあ。…レッド…ごめん、ね？」

「ただただだからッ！それも問題なんですよーがッ！ー許しますとも、全力で！ー」

「お前一人の喜劇なら、帰っていいか」

「ブルー、お前は自分の人間としての問題を解決させる」

「人間として？完璧じゃね？」

「もう嫌だこの二ート！！！！」

「そしてね、イエロー、寝ることまで初心に戻る必要はないんだよ  
!?!?!?」

さて。

次の問題は。

俺は無人の段ボールを眺めて、唸る。

「新たな遅刻魔か、もしくはサボり魔か…。どう思う?」

「あ、ハエ」

「速いねえ」

「ハエーな」

「ムシムシ」

「つまらないシャレ言わないで、俺の言葉を聞いて!」

「だって、コウ、鈍いしさあ」

「グリーン、レッドと呼べ」

「貴重なチャンスなんだぞっ」

「ピンク、君もそっち側?」

「見てて、うざったいんだよ」

「ブルー、その思考やめろ」

「首突っ込んであげようか?」

「全力で断るよ、イエロー」

全く。

こいつらは何を言っているのか。

溜め息を吐いたら、レッドお、と呼ばれた。  
。

ピンクだ。

「ねえ。恋愛対象として、年下は…どうかなあ…？」

少し前屈みになり、俺を見上げるように真っ直ぐ見つめてくる。

「だめ？」

首を傾げ、悲しげな顔。

最後の決定的攻撃に、俺の鼻から血が噴き出す。

「汚いなあ」

「大丈夫！？」

「離れるよ」

「不快だね」

荒い息を繰り返し、ティッシュをひたすらに鼻に詰める。

詰めながら、何度も呟く。

あいつは男あいつは男あいつは男…。

そして俺も男。

チクシヨー！

俺、チクシヨー！！

「勝手に思考を暴走させているみたい」

「やっぱり、年下は駄目なのかなあ？」

「あいつには選ぶ権利もないだろうが」

「モモの可愛さに悶えているだけだよ」

「つつつまり、年下でも、圏外じゃないってことよねッ！？」

イエローの座っていた段ボールから、声がする。

「うん。モモがいけるっばいから、貧乳でも大丈夫だろうね。よかったじゃん」

「そうだよっ！もう一回言っけど、ボクは男だから、ライバルじゃないからね」

「胸囲はモモの方があってるだろうけれど、貧乳はステータスだしな。二次元では」

「まあ、私はあなたの男の趣味を疑っけどね。一目惚れの要素、皆無じゃない」

「好き勝手に言ってないでよバカ！べ、別に胸大きくなりたいとか願う為に流れ星探して、寝不足になったりなんかしないんだからねッ！？あんな奴、好きじゃないんだからねッ！？」

段ボールの中で悶える少女。

ミニスカートからキリンが見え隠れするが、彼ら四人はそれを口に出すほど馬鹿ではない。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5221v/>

---

ヒーロー会議

2011年11月29日23時48分発行